

「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」

(教員養成部会 中間まとめ)

0. はじめに.....1  
 1. 検討の背景.....2  
 2. これからの時代の教員に求められる資質能力.....5

0. はじめに

○ 中央教育審議会は、平成26年7月29日、文部科学大臣から「これからの学校教育を担う教職員やチームとしての学校の在り方について」の諮問を受けた。諮問においては、これからの教育を担う教員に求められる指導力を、教員の専門性の中に明確に位置づけ、全ての教員がその指導力を身につけることができるようにするため、教員の養成・採用・研修の接続を重視して見直し、再構築するための方策について検討する必要があるとされた。

1. 検討の背景

○ 情報通信技術の急速な発展とそれに伴う知識基盤社会の到来、社会・経済のグローバル化や少子高齢化の進展など、我が国の社会は大きく変化してきた。特に近年は、人工知能の研究やビッグデータの活用等による様々な分野における調査研究手法の開発が進められており、将来、こうした新たな知識や技術の活用により、一層社会の進歩や変化のスピードは高まる可能性がある。

○ このような変化の中、我が国が将来に向けて更に発展し、繁栄を維持していくためには、様々な分野で活躍できる質の高い人材育成が不可欠である。こうした人材育成の中核を担うのが学校教育であり、その充実こそが我が国の将来を左右すると言っても過言ではない。そのためには、学校における教育環境を充実させるとともに、学校が組織として力を発揮できる体制を充実させるなど、様々な対応が必要であるが、中でも教育の直接の担い手である教員の資質能力を向上させることが最も重要である。

○ 我が国においても、従来「教育は人なり」との考えのもと、教員について、教育職員免許法、人材確保法、教育公務員特例法、義務標準法等により、教員の養成・採用・研修の充実に努めてきたところであり、上記のような社会変化が加速する中、また新しい教育への期待が高まる中、教員一人一人が、その職は高度に専門的なものであり、国家社会の活力を作り出す重要な職であるとの誇りを持ちつつ、高い志で自ら研鑽することの重要性が改めて認識されるようになってきた。

○ 教員の資質能力の向上については、教育基本法第9条において「法律に定める学校の教員は、自己の崇高な使命を深く自覚し、絶えず研究と修養に励み、その職責の遂行に努めなければならない。」「前項の教員については、その使命と職責

の重要性にかんがみ、その身分は尊重され、待遇の適正が期せられるとともに、養成と研修の充実が図られなければならない。」こととされている。このように教員の資質能力の向上は、教員自身の責務であるとともに、国、教育委員会、学校などの関係者にとっても重要な責務である。

○ 一方、学校教育を取り巻く環境も大きく変化していることも認識する必要がある。かつては、教員に採用された後、学校現場における実践の中で、先輩教員から若手教員へと知識・技能が伝承されることで資質能力の向上が図られるという側面も強かった。しかしながら、近年の教員の大量退職、大量採用の影響により、必ずしもかつてのような先輩教員から若手教員への知識・技能の伝承がうまく図られていない状況があるといった指摘もある。

○ 平成24年8月の中央教育審議会答申では、学校が抱える多様な課題に対応したり新たな学びを展開できる実践的な指導力を身につけたりするためには、教員自身が探求力を持ち学び続ける存在であるべきであるという「学び続ける教員像」の確立が提言されたところであり、真の意味で「学び続ける教員像」を具現化していくための教員政策を進めていく必要がある。

○ これらのことから、我が国の教員の強みを最大限に生かしつつ、子供に慕われ、保護者に敬われ、地域に信頼される存在として、さらなる飛躍が図られる仕組みを構築していく必要がある。例えば、多くの子供たちに将来教員になりたいと思

われるような改革を行わなければならない。

○ 本部会として、こうした教育課程の改善の趣旨を実現するためには、教員の学習観を転換させ、各教科等の指導に関する専門知識を備えた、いわば教員の専門家にとどまらず、アクティブ・ラーニング等の実践力や、学習の成果を適切に評価する力、カリキュラム・マネジメントなどの力を備えた、いわば学びの専門家へと転換することが必要であり、子供たちに教育を行う教員の資質能力の向上を旨めた教員政策の改革が不可欠であることから、教育課程の改善に向けた議論と歩調を合わせながら進めていく必要がある。

2. これからの時代の教員に求められる資質能力

○ 教員が備えるべき資質能力については、例えば使命感や責任感、教育的愛情、教科や教職に関する専門的知識、実践的指導力、総合的人間力等がこれまでの答申等においても繰り返し提言されてきたところである。これら教員として不易の資質能力は引き続き教員に求められる。

○ 今後、改めて教員が高度専門職として認識されるために、学び続ける教員像の確立が強く求められる。このため、これからの教員には、自律的に学ぶ姿勢を持ち、時代の変化や自らのキャリアステージに応じて求められる資質能力を、生涯にわたって高めしていくことのできる力も必要とされる。

○ また、変化の激しい社会を生き抜いていける人材を育成していくためには、教員自身が時代や社会、環境の変化を的確につかみ取り、その時々状況に応じた適切な学びを提供していくことが求められることから、教員は、常に探究心や学び続ける意識を持つこととともに、情報を適切に収集し、選択し、活用する能力や深く知識を構造化する力を身につけることが求められる。

○ さらに、子供たち一人一人がそれぞれの夢や目標の実現に向けて、自らの人生を切り開くことができるよう、これからの時代に生きる子供たちをどう育成すべきかについての目標を組織として共有し、その育成のために確固たる信念をもって取り組んでいく姿勢が必要である。

○ 一方、学校を取り巻く課題は極めて多種多様である。いじめ・不登校などの生徒指導上の課題や貧困・児童虐待などの課題を抱えた家庭への対応、キャリア教育・進路指導への対応、保護者や地域との協力関係の構築など、従来指摘されている課題に加え、先に述べた新しい時代に必要な資質・能力の育成、そのためのアクティブ・ラーニングの充実や道徳教育の充実、小学校における外国語活動、ICTの活用、インクルーシブ教育システムの構築の理念を踏まえた、発達障害を含む特別な支援を必要とする児童生徒等への対応、幼小接続をはじめとした学校間連携等への対応など、新たな教育課題も枚挙にいとまがなく、一人の教員がかつてのように、得意科目などについて学校現場で問われる高度な専門性を持ちつつ、これらすべての課題に対応することが困難であることも事実である。

○ そのため、教員は上記のように新たな課題等に対応できる力量を高めていく必要があり、一方で学校は、「チーム学校」の考え方のもと学校現場以外での様々な専門性を持つ地域の人材と効果的に連携しつつ、教員とこれらの者がチームを組ん

で組織的に諸課題に対応するとともに、保護者や地域の力を学校運営に生かしていく必要がある。このため教員は、校内研修、校外研修など様々な研修の機会を活用したり自主的な学習を積み重ねたりしながら、学校作りのチームの一員として組織的、協働的に諸課題の解決のために取り組む専門的な力についても醸成していくことが求められる。



## II 学校の生活

### 1 学校の1日

教師には様々な仕事があります。授業はもとより、校務分掌や行事の準備、けがの対応などの緊急対応もあります。何より、児童とともに過ごす時間を確保することが大切です。登校前や下校後の時間を活用して、少し工夫をすることで、限られた時間を有効に使うことができます。

#### ある小学校の例

|       |      |
|-------|------|
| 8:30  | 登校指導 |
| 8:45  | 朝の会  |
|       | 授業   |
| 10:20 | 中休み  |
| 10:40 | 授業   |
| 12:15 |      |

児童にとって、登校したときに教師や友達と交わす明るい挨拶が、その日の元気の源となります。子供たちの反応からは、その日の体調や気分、登校前の様子が見えてきます。

教室では、一人一人、顔を見ながら、名前を呼んで出席確認をします。健康観察を行い、必要に応じて養護教諭や学年の教員に連絡します。連絡がないまま登校を認識できない児童がいる場合は、すぐに保護者へ連絡します。連絡が取れない場合は、速やかに管理職や学年の教員に報告し、情報を共有します。

中休み(20分)には、校庭で児童と一緒に遊ぶようにしましょう。時には、教室の窓から校庭の児童の様子を観察して、友人関係を確認することも大切です。

年間指導計画を踏まえて作成した週ごとの指導計画に沿って授業を展開していきます。学習指導要領に基づき、児童に身に付けさせたい力を明確にした学習指導案を作成することが大切です。

学習指導の出発点は、児童の実態を知ることから始まります。学力や体力のほか、友人関係も把握しておくことが大切です。

|       |        |
|-------|--------|
| 12:15 | 給食指導   |
| 12:50 | 昼休み    |
| 13:05 | (清掃指導) |
| 13:20 | 授業     |
| 14:55 | 帰りの会   |
| 15:10 | 放課後    |
| 16:45 |        |

食育の観点を踏まえた給食指導を行います。教卓で全体を見渡しながら食べることも大切ですが、生活班を回って、児童と一緒に食事をすると、その会話の中から、多くの情報を得ることができます。また、授業では見せない児童の様子から、友人関係の変化を知ることができます。

清掃指導では、児童と一緒に清掃をしながら、当番活動の役割と働くことの意義を理解させることが大切です。清掃の様子からも、児童の心の状態や友人関係を知ることができます。教室にゴミが落ちていたり、黒板に落書きがあるといったような状況を放置すると、学級経営が難しくなる可能性があります。また、教室・トイレ・廊下・特別教室・黒板・壁などの清掃箇所は、気が付いたらすぐに確認します。

帰りの会では、一日を振り返り、明日の学習や生活の見直しをもたせるとともに、下校の際に気を付けることについて、一声掛けましょう。

児童が下校しても、校務分掌や学級事務、学年会等、様々な校務があります。優先順位を付けて、一つ一つ確実に実施していくことが大切です。分からないことは上司や同僚にアドバイスを求めましょう。

東京都の学校には、校長、副校長、主幹教諭、指導教諭、主任教諭、教諭といった職があり、それぞれに果たすべき職責があります。一人一人がその職責を果たすことで、組織的な学校運営が可能となります。

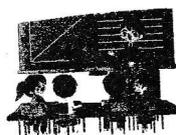


#### 学習指導



- 文部科学省が定めている学習指導要領を基準として、各学校では教育課程を編成しています。学習指導要領を常に身近に置き、様々な機会に内容を確認してください。
- どの教科のどの単元も、児童の実態をしっかり把握することが大切です。そのためには、日頃から、児童の学力や体力の状況、人間関係、休み時間の過ごし方など、実態を把握するための資料を集めておくとういでしょう。
- 新しい単元に取り組む際は、関心・意欲を高めるための導入の工夫が必要です。多様な情報などから、最もよい材料を選んで導入の工夫に生かしましょう。
- 授業の「ねらい」を明らかにしましょう。児童がそのねらいを達成できたことを認識できなければ、「ねらい」が明らかな授業とはいえません。先登教師の授業観察ができる機会には、その授業でどのように「ねらい」に迫ろうとしているかという視点から授業を観察すると参考になります。
- 授業の「ねらい」と学習の「めあて」が適合していることが大切です。そのためには、学習資料や学習カードなどが役立ちます。
- 1単位時間の学習の中で、場面に合った言葉遣い、声の大きさ、身体の動きなど様々な工夫が必要です。そのような工夫により、児童の集中力が高まります。
- 学習内容と生活体験とが関連付けられると、児童の理解がぐいに深まります。
- 「どう教えればいいのか。」と悩んだときは、児童を個別指導する中で、つまづきやすいポイントを明確にしなが、指導方法を改善していきましょう。
- 児童に学習による「達成感」を味わわせるためには、授業の中で思考し、発信する場面を、適切に設定することが必要です。

#### 学校行事



##### <儀式的行事>

- 儀式的行事は、全校の児童及び教職員が一堂に会して行う教育活動であり、入学式、卒業式はもちろん、始業式、終業式のほか、朝会などが考えられます。児童にその場にふさわしい態度を身に付けさせる機会として重視しましょう。場にふさわしい言動の在り方は、各発達段階でしっかり身に付けさせていきましょう。

##### <文化的行事、健康安全・体育的行事>

- 学芸会や展覧会、運動会などの行事は、児童一人一人に明確な「めあて」を持たせることが大切です。何のために取り組む行事であるかを、担任がしっかりと伝えましょう。
- 学芸会や運動会等の当日は、学習の成果を発表する場として大切です。しかし、そこに至るまでの工夫や努力など、行事に取り組む過程で児童は多くのことを学びます。それぞれの行事のねらいを達成できるよう指導していくことが大切です。



常に学び続け、自分を磨き、指導力を高め、子供たちの学力・体力を伸ばし、豊かな心を育てること。

子供たちの「未来」をつくるのは「今」です。子供たちの「今」に、少しでもよい影響を与えることができれば、教師として本望だと思います。

### Ⅲ 講義を通して

教師になりたいと考えている皆さんは、大学で「教育職員免許法」に基づいた講義を受け、日々夢に向かって努力されていることでしょう。

今、皆さんが大学で学んでいることは、教師になったときに、どのような場面で役立てることができるでしょうか。大学で学んだことを実践で役立てるためには、まず、教師としてどのような資質・能力が必要とされているのかを、理解することが大切です。

東京都教育委員会は、大学で皆さんに身に付けてほしい資質・能力を、大きく3領域17項目にまとめました。皆さんが大学で受ける講義の中で、自分自身にどんな力が身に付いているのかを確認する意味で、ぜひ参考してください。

#### 領域① 教師の在り方に関する領域

##### (1) 教師の仕事に対する使命感と豊かな人間性

###### 到達目標

児童に対する深い愛情と教育者としての自覚と責任をもち、児童のよさや可能性を引き出し伸ばすことができる力を身に付けている。

###### ★到達目標を目指して

- 「児童に対する愛情」とは、児童にしっかりと向き合い、児童の喜びや悲しみを共に分かち合い、児童とともに学び、遊び、考えられるよう努力をすることです。そして、そのための研究と修養が常に求められます。
- 児童や保護者を含め、社会全体が「教育者」と呼ばれる人々に対する信頼や期待をもっています。そして、その信頼と期待に応えるためには、あなた自身が「教育者としての誇り」をもつことが大切です。
- 児童のよさや可能性を伸ばすためには、児童の実態や状況を的確に把握する力を身に付けることが必要です。

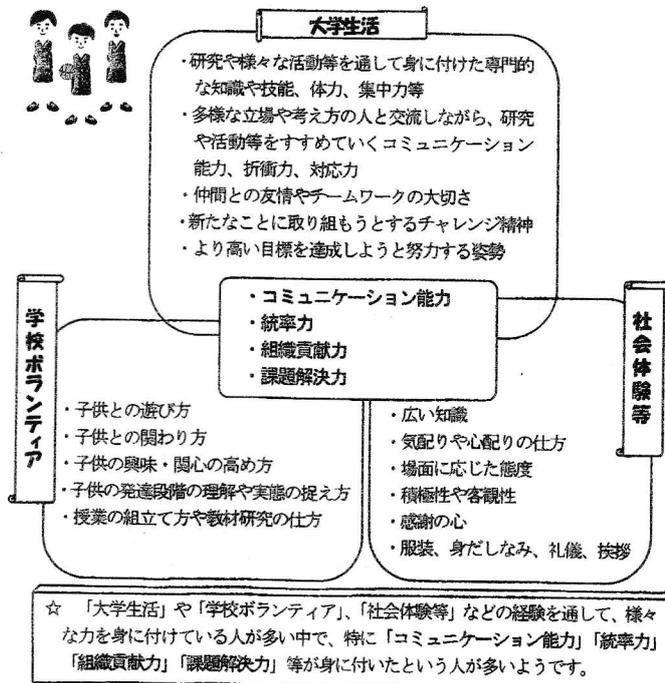
###### POINT

「教師の使命感」、「豊かな人間性」は、一朝一夕で身に付くものではありません。大切なことは、身に付けようとして努力し続けるあなたの姿勢です。児童や保護者、都民から信頼される教師の大前提として、子供に対する深い愛情、教育に対する熱意と使命感、豊かな人間性や人権感覚をもっていることが極めて重要です。

### V 学生生活を通して

大学の4年間で皆さんは、講義やゼミ、サークル活動(部活動)などの大学生活だけでなく、小学校や中学校でのボランティア活動、インターンシップといった社会体験など様々な場面を通して、多くのことを学ぶ機会をもつことができます。その中には、教師を目指す人間として身に付けるべき資質・能力を高める場面もたくさんあります。

ここでは、大学を卒業して間もない若手教員からの、自身の経験に基づくアドバイスを中心に、学生生活の様々な場面を通して身に付けてほしい力を取り上げます。



☆ 「大学生生活」や「学校ボランティア」、「社会体験等」などの経験を通して、様々な力を身に付けている人が多い中で、特に「コミュニケーション能力」「統率力」「組織貢献力」「課題解決力」等が身に付いたという人が多いようです。

<第一次選考> 例年7月中旬の日曜日に実施されています。

- ①教職教養 (60分間)
- ②専門教養 (60分間)
- ③論文 (70分間)

\*第一次選考の合格発表は例年8月上旬です。

<第二次選考> 例年8月下旬の土曜日又は日曜日に実施されています。

- ①集団面接
- ②個人面接

\*第二次選考の合格発表は例年10月中旬です。

#### 平成27年7月実施

##### 教職教養

- 全30問のうち、法令問題は11問でした。
- 学習指導要領に関する問題が2問でした。
- 東京都の教育施策に関する問題が1問でした。
- その他、教育の基礎理論や教育課題(特別支援教育・キャリア教育など)に関する問題が出題されました。

##### 教職教養

- ☆ 教職教養は、東京都立学校の教師として職務を遂行する上で必要な、教育に関する法令や理論などに関する問題が、マークシートによる択一式で出題されました。
- ☆ 法令に関する問題については、日本国憲法、教育基本法、学校教育法、教育公務員特例法、地方公務員法などの基本的な法令が出題されました。
- ☆ 学習指導要領に関する問題については、総則、特別の教科 道徳、外国語活動、総合的な学習の時間、特別活動などが出題されました。
- ☆ 教育原理や教育心理、教育史に関する問題については、学習指導の方法や発達理論、教育評価など、教職課程で学ぶ基本的な事項が出題されました。
- ☆ 我が国の教育事情に関する問題については、中央教育審議会答申や文部科学省が行う調査などが出題されました。
- ☆ 東京都の教育事情や教育施策に関する問題も出題されています。東京都の教育事情等については、東京都や東京都教育委員会のホームページやメールマガジンの「東京の先生になろう！」などで確認することができます。

#### コミュニケーション能力

- 大学生生活、学校ボランティアや社会体験等の多くは、人との関わりの中で行われるものです。そこでこれらの経験を通して、多くの人が「コミュニケーション能力」を身に付けることができているようです。新しい人との出会いの中で多様な価値観に触れ、相互理解を深めていくような体験はどれも有意義です。
- 様々な活動は、多様な立場や考えをもつ人々が統一の目標を共有し、その達成を目指して力を合わせます。この過程は、地域や保護者等、様々な方々と連携しながら学校の教育目標を達成していく過程と共通しているといえます。

#### 統率力

- 「統率力」は、東京都教育委員会が示す、授業力の六つの構成要素としても取り上げられているように、教師として身に付けるべき大切な力です。この「統率力」もコミュニケーション能力と同じように、人との関わりの中で身に付くものといえます。
- 「コミュニケーション能力」と違って「統率力」には「まとめる」「率いる」といった、リーダーシップを発揮するという要素があります。学級担任は児童にとっては、大きな意味でリーダーといえます。児童の信頼を得るためには「統率力」を身に付けた教師でなければなりません。
- 様々な活動等で、組織として共通の目標を達成するためには、様々な立場や考えの人と意思疎通を図りながら、互いの主張などを調整していく必要があります。このような経験が「統率力」の源になります。

#### 組織貢献力

- 「組織貢献力」は、東京都教育委員会が「教員に求められる基本的な力」として示した力の一つです。様々な活動等にすんで参加し、組織の一員として貢献することに取り組んでみましょう。
- 組織に貢献しようとする気持ちは、組織の一員として「自分が役に立った」というような成功体験が基になって高まります。自分の努力が、組織に貢献していることを実感できたときに、その後の行動の原動力になります。

#### 課題解決力

- 大学生生活、学校ボランティアや社会体験等では、自分の取組や所属する組織等の課題や問題点を発見し、その解決に向けて自らの取組を工夫したり努力を積み重ねたりする場面があるはず。多くの人が、このような経験を積み重ねることで課題解決力を身に付けているようです。
- より高い目標に挑戦しようとすることで、現状の課題を発見することができ。例えば、「スポーツの大会等で優勝する。」「昨年度よりも大きなイベントを成功させる。」などという高い目標に挑戦する過程で、現在の取組の課題が明らかになります。このような挑戦の意欲をもち、目標の達成に向けて試行錯誤することが自分の課題解決力を向上させることにつながります。

# 高校教師の特質

——学校格差との関連で——

武内 清

高校教師の生活や意識について、過去3回の調査から報告する。高校教師が共通に直面し悩んでいる問題、年齢や学校格差、公私の意によって異なってくる教育観や生徒観の実態、高校教師の全体像をつかみ、高校改革を考えるときであらう。

## 学校格差

現在の高校では内部に多様な文化が存在・高差をおこしている。その中で、教師文化と生徒文化の差異、そしてそこから生じた意識はとりわけ大きい。  
教師と生徒の文化的差異を生じさせる原因として世代、年齢、性、階層などがあげられよう。教師の方が生徒より年齢が高く、階層は広い。また、育ってきた時代背景が違う。高校教師は男性が多く(約8割)、生徒は男女半々である(学校差はある)。教師は大学卒で中流意識をもつ割合が多い。これに対して、生徒の出身階層や階層意識は

まだまでである。  
大学卒の教師と大学進学をめざす生徒にはめざす目標も一致し、文化的差異はそれほど大きくない。一方、大学へ進学しない生徒が多い学校(以下「非進学校」)では、生徒と教師の意識の違いや差は大きくなる。高校教師の特質をみてくると、学校格差の視点は欠かせない。過去の研究グループ(「モノグラフ高校引合会」；代表 深谷昌志静岡大学教授)過去に3回ほど(1988年、1989年、2年)高校の教員を対象にした調査を実施してきた。それぞれの調査対象地域は、全国、首都立校、首都圏私立校と変わりつつも、

そして、高校教師の教科指導、生活指導、生徒関係、同僚関係、教育観、ライフスタイル等の実態を、高校格差との関連から紹介してきた。本書では、そのデータを詳しく紹介し、高校教師の実態を明らかにしたい。

## 教師と生徒の高校時代の違い

高校教師は、今の高校生と意識や生活が分たちの高校時代とは大きく違うものとなっている。図1は、高校教師の高校時代の

の高校生生活の意(教師の判断に)をみたものである。教師が高校時代の生活よりよくしていたこと5項目(右側)と今の高校生の方がよくしている6項目(左側)の二つに分かれる。教員も高校時代は、勉強や受験を中心に活発な生活を送り、政治的、社会的にも高く、クラスの仕事を進んで引き受けていた。一方、今の高校生たちは、他よりもクラブ活動、異性と付き合ったり人間関係的な側面に傾斜した生活を送っている。また彼らは、学校の規則への反抗も、勉強への不意欲から無気力にもなり、テレビに迷入したりする生徒も

増えている。少なくとも教師たちは、20代の生徒たちをそう思っている。  
さらに、学校格差も顕著としてある。進学校の教師は自分の勤務する学校に、学習・復習をし、大学進学をめざして勉強する生徒や、クラブ・部活動に打ち込み、学校生活を楽しんでいる生徒が多いと認識し、一方、非進学校の教師は、勉強をよくする生徒や学校生活を楽しんでいる生徒は少なく、学校の規則に反抗を感じたり、何事にも無気力を生徒が多いと感じている(表1)。

表1 勤務先の生徒(とても多い十かぎり)の割合(%)

| 項目                         | 進学校  | 非進学校 |
|----------------------------|------|------|
| 勉強をよくする生徒                  | 97.8 | 38.4 |
| クラブ・部活動に打ち込み、学校生活を楽しんでいる生徒 | 96.3 | 34.0 |
| 学校の規則に反抗を感じたり、何事にも無気力な生徒   | 71.6 | 53.9 |
| 勉強をよくする生徒                  | 25.1 | 43.2 |
| 学校の規則に反抗を感じたり、何事にも無気力な生徒   | 18.0 | 47.2 |
| その他                        | 3.7  | 37.4 |

## 教師のタイプ

1983年の調査(「モノグラフ・高校生'83」Vol.10福武書店)では、教師の教育観が年齢や学校格差によって大きく変わっていく様子が明らかになった。教師への質問の回答を、数値化項目(類似なものを集める手法)にかけて分析したところ、生徒好きか生徒嫌いか、教師の自信の有無が、教師を分類する基準として抽出された。その二つの基準から教師の四つのタイプが考えられた。平均で見ると、図2のように20歳代は、教師には自信がないが生徒が大好きの「モラトリアム教師」が多いが、30歳代になると、教師への自信がもてないまま生徒との距離が大きくなっていく「スランプ教師」になり、40歳代になると、生徒との距離はそのままで、役職につき教師に対して自信をもつ

「進学校教師」、50歳代になると、教師への自信と同時に子どもへの親近感をもつ「円熟教師」となる。また、進学校の教師は教師に自信や自負があり、非進学校の教師は自信や自負をもてないというように、学校格差によって、教師への自信が左右されるといえる。また、進学校の教師は教師に自信や自負があり、非進学校の教師は自信や自負をもてないというように、学校格差によって、教師への自信が左右されるといえる。また、進学校の教師は教師に自信や自負があり、非進学校の教師は自信や自負をもてないというように、学校格差によって、教師への自信が左右されるといえる。

進学校教師では教師は生徒との高差が少なく、常に教師としての力量を問われる状況に置かれているのである。

## 教科指導、生活指導の実態

教師たちは必ずしも教育効果の向上を意図して行っているわけではなく、学校で生き残るために「奮闘せざるを得ない」(hidden pedagogy)を服従しているという指摘もある(古賀正義「学校の存立と階級意識」)。その実態はどうであろうか。

生徒との高差の多い「非進学校」での授業を「進学校」(それぞれ4年間制大学進学率、30%以下、30%以上、「モノグラフ・高校生'90」Vol.22福武書店による)との比較でみてみよう。  
授業の仕方を見ると、非進学校に多いのは「ノートのとり方を指導する」、「生徒に人気のマンガや音楽を話題にする」等である。このように非進学校の教師は生徒の文化に接近し、生徒をひきつけ、生徒をなんとか学習に向かわせようと努力している(表2)。  
生徒との接点を見ると非進学校の教師は「生徒と一緒に指導をする」、「自分の方から声をかける」、「生徒と話をする」など、教師から進んで生徒への接点をはかっている(表3)。

また、生徒の個人的情報、つまり家族構成、出身中学、通学方法、友人・友人グループ、部活動、アルバイト、授業態度、成績についても、非進学校の教師はよく傾注している(表4)。  
さらに、「高校教師としての必要な能力・姿勢」として、進学校の教師は「専門性の高い授業をする」、「大学入試に役立つ授業をする」をあげる率が高いのに対して、非進学校の教師は「ホームルームの運営がうまい」、「問題をとおした生徒を諭す」、「欠席した生徒の欠へ電話する」、「部活動を熱心に指導する」、「身体み等に生徒と雑談する」、「一声で生徒を静かにさせる」など、生徒との積極的な関わりをあげる率が高い(表5)。

これらは、非進学校の教師の授業や生活指導をやりやすくする戦略とも考えられるが、進学校より非進学校の方が、教師と生徒のホットな関係が存在するということの証明でもある。

非進学校では生徒への管理より「親しい人間関係」を築いた指導が行われているという実態報告もある。

クラスによっては、遅刻者が3桁になる日も珍しくない。担任は、1時間目の授業が始まってから登校してこない生徒に、

表2 授業のしかた(いつも十かぎり)の割合(%)

| 項目            | 進学校  | 非進学校 |
|---------------|------|------|
| ノートのとり方を指導する  | 49.9 | 71.5 |
| 問題をとおした生徒を諭す  | 42.2 | 61.5 |
| 欠席した生徒の欠へ電話する | 78.5 | 72.8 |
| 身体み等に生徒と雑談する  | 33.4 | 80.5 |

(モノグラフ・高校生'90 Vol.22福武書店、1990年より)注:進学校:大学進学率30%以上、非進学校:同30%以下

表3 生徒との接点(%)

| 項目                 | 進学校  | 非進学校 |
|--------------------|------|------|
| 生徒と一緒に指導をする        | 47.4 | 85.2 |
| 自分の方から声をかける        | 42.2 | 65.5 |
| 生徒と話をする            | 37.0 | 59.4 |
| 生徒と雑談する            | 34.8 | 56.0 |
| 授業態度について生徒から質問を受ける | 29.9 | 45.0 |

(モノグラフ・高校生'90 Vol.22福武書店、1990年より)

図2 高校教師のタイプ

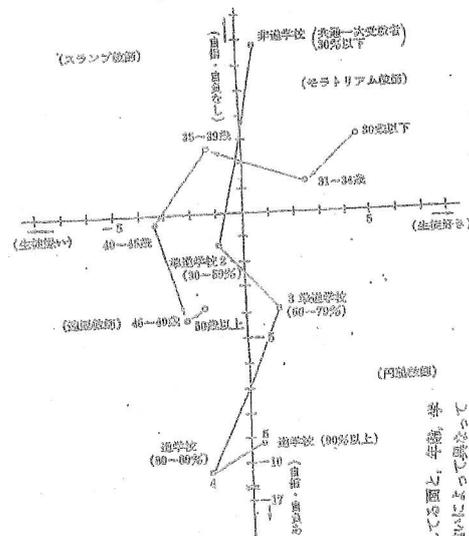


表4 自分のクラスの生徒についての知識(3分の2が半分未満)の割合(%)

| 項目        | 進学校  | 非進学校 |
|-----------|------|------|
| 家庭構成      | 51.6 | 87.4 |
| 出身中学      | 29.9 | 32.0 |
| 通学方法      | 54.7 | 72.0 |
| 友人・友人グループ | 81.0 | 78.6 |
| 部活動       | 39.9 | 89.0 |
| アルバイト     | 47.9 | 50.3 |
| 授業態度      | 89.0 | 83.7 |
| 成績        | 87.5 | 82.5 |

表5 高校教師としての必要な能力・姿勢(とても十かぎり)の割合(%)

| 項目            | 進学校  | 非進学校 |
|---------------|------|------|
| 専門性の高い授業をする   | 74.0 | 85.0 |
| 大学入試に役立つ授業をする | 72.0 | 21.0 |
| ホームルームの運営がうまい | 68.0 | 87.0 |
| 問題をとおした生徒を諭す  | 68.0 | 68.0 |
| 欠席した生徒の欠へ電話する | 40.0 | 73.0 |
| 身体み等に生徒と雑談する  | 41.0 | 66.0 |
| 一声で生徒を静かにさせる  | 37.0 | 69.0 |

しかし、わたしはほどこまの寂しい日々である。前校長では「無縁『愛校心』という言葉は胸に響かなかったが、生徒と一緒に悩み喜び、職員間に連帯感と思いやりがあった。また、新しい方向へ変化させていくこととするエネルギーに満ちていた」(「モノグラフ・高校生'93」Vol.30福武書店)以上のように、生徒との文化高差のなかで悩み奮闘し、生徒の成長や向上を目指してこそ、高校教師としての醍醐味と考えている教師も少なくない。

## 公立校、私立校の違い

1992年に実施した調査は、私立高校の教師を対象にしたものである(「モノグラフ・高校生'93」Vol.30福武書店)。私立高校の教師たちは今の私立ブームの中で、比較的学力の高い生徒を相手に生活指導にエネルギーを費やすこともなく、授業もやりやす

い。しかし、公立校では「無縁『愛校心』という言葉は胸に響かなかったが、生徒と一緒に悩み喜び、職員間に連帯感と思いやりがあった。また、新しい方向へ変化させていくこととするエネルギーに満ちていた」(「モノグラフ・高校生'93」Vol.30福武書店)以上のように、生徒との文化高差のなかで悩み奮闘し、生徒の成長や向上を目指してこそ、高校教師としての醍醐味と考えている教師も少なくない。

No.4  
すべての学校に共通して、年齢、学校格差、公私の意によって異なってくる問題とがあり、それらも認識して、高次教育及びそこで教師のあり方を考えていくべきときであらう。

1 教師には、どのような資質や能力が必要だと思いますか（自分の意見）

明るく、子ども達と接することができる。子ども、他の教員、保護者とよくコミュニケーションを取ることができる。子どもに教えるだけの知識を持っている。教師になっても新しいことをどんどん学ぶ姿勢。責任感。

2 政府や行政は、教師に必要な資質や能力として何を挙げていますか。（中教審答申、他）

使命感、責任感、教育的愛情、専門的知識、実践的指導力、学びつづける教員像状況に応じた学びを提供する力、情報を適切に収集・選択・活用する能力、深く知識を構造化する力、子どもたちがそれぞれの夢や目標の実現に向けて、自分自身で道を開くための育成を促すという信念。

3 教師の特質の問題点として、どのようなことが挙げられていますか（清水）

それに対して、どう思いますか。

① 子どもに対して高い立場に立っていると思っている、「安定した職業」であると考え教師同士で競争しない、教師になる為に勉強したストックだけでそこから新しいことを学ばない、教室内の子どもしか知らない。→ 株を担う子どもに教育するという立場にいるのだから、「どうやってわかりやすいかなどをよく考えて、新しい知識、他の教員から学べることを身に付ける必要があると思う。

4 教師にとって、人間性と教育技術（学力や知識も含む）のどちらが大事ですか（向山参照）

人間性の方が大事だと思ひ。学力や知識は、教師になる時点で持っているのだから。子どもは先生のことを良く見ているので、子どもと関わる中でそういった先生の人間性もまねしてくれることが望ましい。

5 現代の教師の抱える問題は何でしょうか。

児童が登校してくるよりも早く学校へ行つて、安全に登校できるように準備し、15時頃に児童が帰っても、校務など、多くの仕事があるので、それを終わらすまで帰る作業時間が長い。昔はたいてい帰っても特に何もなかったが、今はちやうどした子どもも体罰と言われたり、セフハラと言われたりして、どうしていいのかわからない。

6 教師の資質を形成する為に、また大学でどのような授業があればいいと思いますか。またどのような大学生活を送ればいいと思いますか。

教師は、授業、学校生活を通して話すことが多いため、話し手のネタが必要だと思ひるので、様々な経験を自分がすることが大切だと思ひ。大学では知識や、指導法を身につければいいと思ひるので、人間性などを身につけるには多くの人と関わり、自分の経験を大学生活の

7 他の人からコメントをもらう 内に、していくことが大切だと思ひ。

(長) とお好みに書かれています。

次回良い作品として載っていると良いですね。

1 教師には、どのような資質や能力が必要だと思いますか（自分の意見）  
まず第一に観察能力が必要だと思います。生徒の日頃の体調をよく観察し、何かおかしいのではないかと気がつける能力。

また、先を予測する能力が必要だと思います。起りそうなことを未然に防ぐことが大切だと思います。

2 政府や行政は、教師に必要な資質や能力として何を挙げていますか。（中教審答申、他）

- 使命感や責任感、教育的愛情、教科や教職に関する専門的知識、実践的指導力、総合的人間力等
- 学び続ける教員像
- 深い知識を構造化する力
- 信念を持って取り組める
- 「チーム学校」という考え方

3 教師の特質の問題点として、どのようなことが挙げられていますか（清水）  
それに対して、どう思いますか。

〈問題点〉 教師は子ども社会に安住する。教師は互いに競争しない。教師は教室の中の子ども  
教師は教えるが、学ばない。教師は人生を語らない、語れない。しか知らない

〈思うこと〉 この方は、教師は学ばないと言っているが、今は英語が教科となったりして、大学へ  
学び直すために行っている先生もいる。

4 教師にとって、人間性と教育技術（学力や知識も含む）のどちらが大事ですか（向山参照）

ただ単に、優しくて、誠実という人間性だけでは、教師は務まらない。しかし、子どもたちに教えられるだけの、学力や器量があれば、子どもに教えることは難しい。だから、どちらとも能力が必要である。しかし、どちらかといえば、教育技術が必要であると思う。

5 現代の教師の抱える問題は何でしょうか。

よく教師は、ブラックだと言われている。夜9時や10時に学校から帰るということは、普通のことらしい。また、休日に部活動の指導やモニター・ペアレントがいる所偽り、教師の精心的な負担や不安が大きいと思う。

6 教師の資質を形成する為に、また大学でどのような授業があればいいと思いますか。またどのような大学生活を送ればいいと思いますか。

一般教養の授業や指導法の授業だけでなく、PTA活動の運営。また、保護者や生徒との面談の行い方を教える。大学では、勉強をしっかりと行うことは、大切だが、学生ならではの時間を送ることも大切であると思う。

7 他の人からコメントをもらう

（牙田） 教師はブラックだとばかりに言われている。

それにも負けないくらいの忍耐力と技術性を身に付けたいです。

